
ある稲荷の神隠し-稲荷兄弟篇-

しいな けい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある稲荷の神隠し - 稲荷兄弟篇 -

【Nコード】

N9511X

【作者名】

しいな けい

【あらすじ】

ある日突然稲荷神『紅葉山』の姿がなくなったのは

ひとの子の世でいうところの十四年前。

突然の失踪の鍵を握っていたのは

里の少女、秋津柚香と小さな稲荷神。

『紅葉山』を巡る若いころの物語。

シリーズ連作・『ある稲荷の神隠し』のお稲荷さんサイドからのお話になります。

そして彼は眠る (1)

「え、お兄様が、朱善しゅぜんに『紅葉山もみじやま』を譲ると仰ったのですか」
「そうだ」

『大江山』は夏の強い日差しの中にあつた。

焦げるような陽光を避けるように、妻折傘の下で稻荷神二柱が逢瀬をしている。

日差しに霞むことない黒く艶のある髪を持つ稻荷神は『葵山あおいやま』時雨ぐれ。

日の光と紛うほどの白銀の髪を持つ稻荷神は、『大江山おおえやま』銀朱ぎんしゅ。

髪はおなこの銀朱の方がずっと長いが、時雨も総髪しょうがの美髪を垂らしている。

お互い良く似た青い目を交わし、時雨の手土産いちぢくの無花果羊羹いちぢくを食する手を止めた。

「つまり、朱善が『紅葉山』になるという事でございますか？ 一体どういった経緯でございましょう。朱善も祥香しょうかもまだ私預かりで分社先は決められておりませんが……」

「下らん口約束だ。先だつての『豊山』の宴一件で分社達を『紅葉山』に預けただろう。その時に『大紅葉山』が分社らと鬼遊びをしたそうなのだ」

鬼遊びとは物陰などに隠れ、それを鬼が見つけるといふ子供の遊びのことか、と銀朱は確認をしてしまった。

時雨は羊羹へ視線を落としたまま、大きくため息をついて子細の説明をした。

鬼ごっこで定めた期限内に『紅葉山』が隠れた兄妹を見つけた場合は、分社二柱は早々に寝る。

期限内に見つけられなかった場合は、朱善に『紅葉山』を譲る。随分と賭けの内容の重さが違うが、そういう取り決めだったそう
だ。

「そもそもなぜそんな賭け事を持ち出されたのでしょうか。寝かしつけるなら他にも方法がありましたように」

勝負の内容の方に注視して欲しかったが、銀朱はそこが気になるようだ。

時雨は視線を軽く空へ投げてから、手元に戻して憶測で語った。

「あの宵、『大紅葉山』を殺めるつもりで『豊山一ノ輪麓』守夏が紅葉山へ来ていた。恐らく『大紅葉山』は巻き込まないようにと、鬼遊びにかこつけて、分社らを争いの場から退けたのだ」

時雨の言葉に、銀朱は眉間に皺を寄せ「あの白けむくじやらのせいですか」と毒づいた。

ふたりにとつても、そして話題の『紅葉山』にとつても『豊山一ノ輪麓』守夏は敵方になる。

突然の奇襲を受けた『紅葉山』は、銀朱から預かった二名を巻き込むまいとしたのである。

「なるほど、鬼遊びであれば自然とお兄様から離れることになりますしね。さすがお兄様、幼子相手も手慣れておられる」

どこか納得するところが違つとき雨は思うが、銀朱が『紅葉山』鼻肩なのは知ったことだった。

一々思うところはなかった。

一応、ではあるが。

「そして『大紅葉山』が守夏との問答の末、鬼遊びの刻限は過ぎてしまい　結果、朱善に『紅葉山』を譲ると、そういうことになったようだ。あの方の中ではな」

時雨は語尾を強めて口の中に羊羹を放り混んだ。

咀嚼が乱暴になるのは、『紅葉山』の行いに納得がいかないからである。

「未熟な分社相手にも約束を反故になさらないところは、お兄様らしいです」

「そこは感心するところではないぞ」

「しかし納得がいきました。朱善はあの一件より、よくお兄様の元

へ行きたがるのです」

「よもや、『大紅葉山』に早く『紅葉山』を譲れなどと、阿呆なことを催促しに行っているのではあるまいな

」そのような話は聞きません。さすがに本気で山号を譲り受けようと思っっているわけではないかと……山号を譲り受けるということは、お兄様自身が消えるということか、また別の山を冠するということですか、それくらいは朱善も分かっています」

話題の『紅葉山』は、名を雅親朱秦まさちかしゆしんと言う。

その雅親朱秦としての個体は、銀朱や時雨が知る限り稲荷の世間闢より『紅葉山』を守り続けた。

外見はひとで言うところの七歳ほどの幼子であるが、その内側に重ねる年輪は、銀朱と時雨を足してもまだ足りない。

今回問題にされているのは、その『紅葉山』という名を持つ『もの』が、雅親朱秦から朱善へと変わるといふそれだけのことであったが、名を譲った雅親朱秦はどうなるかということが大事なのである。

消えるなどと言う事は、もっての他であるというのが時雨の主張である。

だが山を離れ、別の山を守る担い手となるとしても、果たしてそれに見合う山があるのかという事だった。

『紅葉山』がひとの子にも稲荷兄弟たちにも偉大な山であるということは、その座を退いた雅親朱秦が次に守るべき山もまた、その働きに合った山でなければならぬ。

だが、この国にはもう万という稲荷神が散っている。

名山と呼ばれる山にはすでに他兄弟が守り、飽和状態と言ってもいい。

つまり行き場がないのだ。

行き場のない稲荷はどうなるか。

当然、消滅以外ない。

「先ほど『紅葉山』で挨拶した折りに朱善見つけ、本気にするなと

言いつけておいたが、聞くとところ本人は『紅葉山』より侍従の『紅葉山一ノ宮麓』になりたいようだな」

「はい。そうです。ですから朱善は隠れ鬼の賭け事のことなど、すっかり忘れておりますよ」

『紅葉山一ノ宮麓』というのは、『紅葉山』の侍従の位である。

銀朱や時雨も侍従を持つが、それらとは存在自体が異なり、稲荷神がその役割につく。

理由は単純明快、『紅葉山』が広大であるからである。

山を三つに輪切りにし、頂上から一ノ宮、二ノ宮、三ノ宮と分け、それぞれを侍従が治める。

よって『紅葉山一ノ宮麓』は、侍従であり稲荷神と言う、特殊な立ち位置になるのだ。

「総本山が朱善をどこへ分社させるつもりかは分かりませんが、もし朱善の願いが叶うなら、私は喜んでその任を任せたいと思います」
銀朱は常々、『紅葉山』の兄が心配でなかった。

彼は本来三柱の侍従を持つ身でありながら、今は誰もつけていない。

たったひとりで、広大な『紅葉山』を守り続けているのである。
彼を守りたいと思う銀朱の願いを、銀朱の子であり弟である朱善が果たしてくれるなら、これ以上のない喜びだった。

「間違えるな。当の『大紅葉山』は朱善を『紅葉山』にしようとしていて、自分の侍従にしようとしているわけではない」

時雨の眉間に寄せた皺が青筋に変わって脈打っていた。

『紅葉山』のことを考えると頭が痛い。
額に手を当て頂垂れる。

「問題は朱善ではなく『大紅葉山』だ。あの方は山を譲れば消えてしまってもいいと、そう思っているに違いない。総本山にもすでに山号返上の願い出をしたようだ」

総本山は稲荷たちを統べる管理機関である。
そこへ意見を出すということは遊びではない。

「そこで、私が十色じっしきの筆頭の位に置かれたのだろっな。恐らく『紅葉山』の監視の為だろう。本来監視の役目を担っていた『大江山』がこうであるからな」

「こう、とは何です。別にお兄様は誰かに迷惑をかけるような行いはしておられないでしょう」

銀朱は頬を膨らませるが、時雨はほとんど虚空を指で叩いた。
こういう問題が起きているだろうという示唆である。

そして彼は眠る (2)

「ということは時雨様が私にこの話をされたのは、『紅葉山』のお兄様の分社である『葵山』時雨としてではなく、稻荷格式において三朱に次ぐ名勝の位、十色の筆頭としてのお立場によるものだと言う事ですか」

銀朱としては、時雨には権威や策略の判断で『紅葉山』を見て欲しくはないのである。

「どちらもだ」

時雨はどちらにも取れる簡素な返事を返して、銀朱の青い目をじつと見つめた。

「そしてどちらの立場においても、私は役目を果たすには今は不十分だ。私が問い詰めてもどうせまともに相手はして下らないからな。そこでそなたに頼みたい」

「私に、お兄様を説得せよ？ お兄様にもお考えがあるのかもかもしれませんよ」

いつも淡々と役目をこなす婿殿であるが、今回は動きが取れずに困惑をしているように感じた。

「悠長なことを言うものではない。守夏から聞いたが、『大紅葉山』は守夏に処断されるつもりだったようだ。辞世まで読んでいたのだぞ。そう考えると朱善に山を譲るといふ口約束を切り出した時点で死に向かう気持ちの本気であつたと考えるべきだ。いや、あの悪知恵の働くお方の事だもつと前から何か綿密に線を引かれていたのかも……」

「まさか。朱善との約束は偶然でしょう」

「側にいるお前がその樂觀視で何とする。朱善のことは空になる山のことを考えて、代行を定めようとしていたに違いないのだ」

「しかし、時雨様のお考えではまるでお兄様は 人生の後始末をしているようではないですか」

「そのようにしか見えぬだろうが。守夏に処断を受けようとしていたあの時、私もあの場にいた。はつきりとお前は私が殺してやると言ってやったが、反発する様子もなかったのだぞ。あれは間違いなく全てを受け入れる目だ」

「時雨様でなければ、その言葉土中で後悔させるお言葉です」

銀朱が威嚇をしたが、時雨は無視する。

「あの方の恐ろしいところは、己の目的の為なら自分を切つてでも遂行するという、神の根源たる真^{まこと}が強烈であるということだ。私の考えが当たっていたとしたら、あの方は消える。確実にだ」

時雨の言葉に銀朱は返す言葉を探し沈黙した。

そこまで不安要素を並べられると、本当にそんな気がしてきてしまう。

最近 『紅葉山』 が全てを投げ出したいと思うような大事が起きていただろうか？

側にいて自分が気づかぬようなことで。

銀朱は色々と考えてみるが思い当たらない。

不吉さを帯びた思考の肥大化によって、銀朱の口の中に残っていた優しい無花果の味も消えてしまった。

「そなたは『大紅葉山』を幸せにすると誓っていたわけだからな。死なれては困るだろう」

「意地の悪いことを確認なさらないで下さい。時雨様はどうなのですか、まさかまことに死ねばよいなどと不謹慎なことを考えておいでは」

「死なれては困る。父上として、そして『紅葉山』としてもだ。だがあの方の切なる望みが本当に死であるなら、私が与えて差し上げるべきだとも思う」

その言葉の奥底に、多くの感情が交差されているのを知っていた。

銀朱はあえてその言葉を追求せずに、俯いた。

「私が言いたいのは、あの悪狐の悪知恵だの線引きだのを討論したわけではなく、それをどう回避するかという話だ。そしてそうさ

せるのは私より銀朱の方が適任であるということ。そなたは生まれ落ちてより『大紅葉山』の深い寵愛を受けている唯一の稲荷神だ。誰よりもあの方の心に近い」

時雨は膝の上で手を組んだまま、一点を見つめている銀朱を覗き込んだ。

深刻すぎる推測は、兄のことになると途端に脆くなる心を刺激しているようだった。

思い込みの激しいおなごだと分かっているので、時雨は話を切り替えた。

「私は大陸の方へ足を伸ばさなければならぬが、ふた月もあれば戻るだろう。その間『大紅葉山』のことは頼みたい。用向きはそれだけだ」

時雨は力を蓄え、研鑽を深めるために大陸へ行幸が決まっていた。長旅前の挨拶に先ほど『紅葉山』と顔を合わせてきたばかりだが、時雨が考えるような暗い印象を『紅葉山』が投げかけてくることはなかった。

『紅葉山』はいつでも笑顔を絶やさない稲荷神である。

その笑みを、今回も一切崩すことはなかった。

浮かべる微笑みが、どんな意味を持っているかは時雨にはまだ読めない。

数千年を生き、名山『紅葉山』の名を持ち、数ある伝説をひとの子と共有する長兄。

本心を誰と共有することもない。

それは時雨が一番よく知っている。

だがその個体で内包する秘密の多くが、彼ら稲荷の世の構成に深く根ざやしていることを知って居る。

時雨は抱える全てを吐き出してもらい、そしてそこで彼に、本当に微笑んでもらいたいと思うのだ。

真実においては何の繋がりもない己のことを、慈しみ守ってくれた恩人にできることはそれだけだと思える。

「そういえば先日、『豊山』での一件、八雲は私の監督下に入りましたが、『鵜沼山』のお兄様や『極楽山』のお姉様の処罰はどうなつたのですか」

「主たる企みは八雲のみで、あの二名は無関係ということでお咎めはなかつたな。本当の処はどうだかは知らないが、とりあえず『極楽山』に関しては『豊山』殺しなどは荷担してはいない。それは間違いない」

「なぜ言い切れるのですか？」

「『極楽山』は『豊山』を誰より敬愛している。そなたがこれと言つた明確な理由なく、『大紅葉山』に傾倒しておるのと同じ。あれは病と思わんばかりに父である『豊山』を愛している」

「どのように思えば『豊山』のお兄様にそこまで心酔できるのか、お伺いしたいのですが」

「『極楽山』も同じようにそなたを見ているだろうよ。悪狐『紅葉山』に毒されて、愚かな妹だと思っている」

「私、お姉様方と親しくなれない性格だと自負がございましたが、特に『極楽山』のお姉様とは一番縁がなさそうです」

「私にとつての八雲のようなものだ。『極楽山』もそなたに負けぬ気性の荒いおなごだ、同じ性質の者同士相容れないのだろう」

「……であれば、『極楽山』のお姉様は、愛する『豊山』の命を狙つた八雲のことを恨んでいましょうね」

「八雲は行いに相応しい罰を受けた。それ以上を望むのであれば、私刑でしかない。『極楽山』もそれ以上は求めまいよ」

「そうでございましょうかねえ」

突然、横から声が差し込まれた。

水入らずに、盛大に水を差す。

時雨は心底不機嫌そうな顔をして、横に付き添う影を睨んだ。

長い黄金色の総髪につんとつり上がった目は青い。

時雨の侍従の村上である。

「『極楽山』瑠璃姫といえば、裏であの手この手と暗躍され、巷で

は女狐と蔑称もございます。おなごと言いますのは笑顔の裏でいかようにも手を汚す生き物でございますよ」

銀朱は得意げに裏事情を語る村上に視線を投げ、それから時雨を見た。

時雨はまた余計な事を言つと、村上に冷やかな視線を流すだけだ。

「村上は『極楽山』のお姉様は、あの宴の騒ぎについて総本山の評定を満足しないと思うのか」

「はい。私は暗部に金でも握らせて、ここ『大江山』まで忍のものでも遣つて、八雲殿、敷島殿を始末するのではないかと読んでおりますよ。ふたりがある日突然喉をかつ切られて死んでいたら、間違はなく瑠璃姫の仕業でございますようなあ。あの姫君は油断なりません」

ちよんちよんと首もとで人差し指と中指を合わせたり離したりしてみせながら、村上は変わらぬ調子で続ける。

「『豊山』派においては、すでに八雲殿は汚点でしかありません。処分すべきと考える者も多いでしょう」

「私は八雲がどうなつても構わないが、そなたの身に危険が及ぶのは避けたい」

「私が端者に命を奪われるとお思いですか、時雨様」

「茂野もいるし心配はしていない。それに『極楽山』もそこまで悪いおなごではないはずだ」

「やけに『極楽山』のお姉様の肩をお持ちになりますね、時雨様」

銀朱の反応を見て、村上は時雨が説明するより早く身を乗り出した。

「『極楽山』瑠璃姫といえば、『豊山』の美姫と名高い御方。しかも時雨様に夢中でございますよ！ 何度婿入りを求められて直参したことでありましょう。時雨様もまんざらじゃあ、ありませんでした」

「ほう」

銀朱が少し冷えた声を上げるので、時雨は焦って村上の首を絞めた。

「まあ噂くらいには、とても才知ある美しいお姉様だとは聞いております。人見知りで社交性の欠けた田舎者の私に比べれば、それは比べものにならない姫君でしょうね」

「そういう理由ではなく、だな……」

「どうせ私は田舎稲荷の山芋でございます」

「待て待て、どうしてそういう話になる。村上、お前が余計なことを」

「とろろ蕎麦は美味絶品でございます。時雨様も大好物でございますよ」

「お前は黙れ。とにかく先だつての宴の影響はまだ残っているということだ。『大紅葉山』のことをよろしく頼む」

「言われずとも私は『大江山』です。時雨様が『豊山』派でのんびんだらりされていた時も、ここですつとお兄様を守って参りました。今さら気を配れと言われることでもありませんっ！ お好きなだけご旅行に行かれるとよろしい」

銀朱がさつと席を立ててしまい、本殿へ歩いて行ってしまう。

残された茶席で、『葵山』は楽しそうな侍従へ視線を投げると、もう一度思い切り力を込めて頭にげんこつを食らわせてやった。

時雨は銀朱にもつと話をしたいことがあったのだが、まともな別れもできずに大陸へ研鑽の旅へ向かうことになった。

その出立を見計らっていたかのように、時雨の不吉な予感は的中することになる。

『紅葉山』雅親朱秦の姿が、忽然と稲荷の世から消えたのである。

もつひとりの『あぶらあげ』 (1)

「柚香、『大紅葉山』はお元気でおられるか？」

『大江山』銀朱の分社、朱善は『紅葉山』の麓から離れ人の気配も少ない路地でひとの子に声をかけた。

声をかけられたひとの子は、長い髪をさっと振って顔を上げたが、すぐには答えなかった。

代わりに路地の先に覗く大通りからは、賑やかな祭拍子が響いてくる。

ここは古街道からも離れた山里で、本来なら人が山を切り開くこともなかった。

それが今日現代までこうして栄えているのは、ひとえに里を見下ろすように聳える紅葉山の美しさによるものである。

訪れる知識人の心を紅に染め、いかなる猛者にも心の安らぎを与える錦の名山紅葉山は、その地に住むものたちに多くの恵みを与え続けてきた。

このひとの子もその恵みを受ける一人である。

秋津柚香、十六歳。

彼女は難病を患い、『紅葉山』の延命の恵みを受けていなければ今ここにいない。

三途の川で石を積み上げている頃だった。

「元氣じゃないわね……でも消えてもいないはずよ。私がこうして元気でいられるんだもの。それが立派な証だわ」

柚香は生粋のひとの子であるが、恩恵を受け稲荷神の分社である朱善を視ることができた。

しかし稲荷がひとの子に直接関わるのは禁じ手とされている。

稲荷個体の意志を持って執拗にひとの子に関わることは、ひとの世の運命摂理をねじ曲げる。

朱善がしているのは、まさに禁じ手であった。

だがひとの子の願いを叶えるという稲荷の本分を果たすことすらできない『分社』身分である朱善は、稲荷神として半端もの。

見習い身分である。

禁じ手が朱善に適応されるかどうかは誰にも分からないが、その危険を冒してまで接触するその理由は、きちんと存在していた。

「最近全然話もできないのよね。声も聞こえない。姿も見れない。死んでしまったんじゃないかってたまに心配になることはあるわよ」「命を繋げるために、恐らく深い眠りに入られているのだろう。寝ていれば必要最低限の力しか必要としないのはひとの子と同じだ」「柚香が受けた恵みとは、その体の内に『紅葉山』稲荷神を宿するという奇跡である。

つまり人でありながら、神。

現人神と言える。

それにより、柚香はひとの子であるが、同時に稲荷の世との関係も深い。

稲荷の世で姿を消した『紅葉山』はある目的を胸にこのひとの子、柚香の中に居るのだ。

「『柚子』の事は、その後どうしている？」

「『あぶらあげ』が望んだ通りに、私は『柚子』を守ってる……つまり」

「あぶらあげ」というのは、『紅葉山』の別称である。

朱善はその愛称はどうかと思うことがあるのだが、『紅葉山』は気に入っているようだった。

本来この愛称を呼ぶものは、『柚子』と呼ばれる一族の娘だけだった。

その点柚香は、正統な『柚子』ではない。

一族の末席ではあったが、すでに本家とは縁の遠い分家の娘である。

今の世を生きる『柚子』は名前を祐喜という少年だった。だが、この少年は神を信じず、視ることもできない。

それどころか神の存在を否定をして『紅葉山』を苦しめた。

それでも『紅葉山』はこの『柚子』を愛するために、ひとの子である柚香の中に全てを委ねた。

神ではなくひとであるのなら、『紅葉山』は『柚子』を愛することができたし、その思いは受け入れられると考えたのだ。

実際柚香が祐喜を気につけて十数年、祐喜は柚香に思いを寄せている。

柚香という層を挟んではいるが、『紅葉山』の目的は叶っている。

「『柚子』に神を信じて貰う方法は、本当じゃないのか……。信じてくれば『紅葉山』はお戻りになれるはずなのに……」

「私だって何度も信じてもらえるように計らったわよ。でも祐喜は根っここのところから否定してるんだから無理なの。どんな奇跡を見せたって、それが神様がやったんだって素直に信じる何かなきゃ。そうね……朱善は死んだ人を生き返らせる力はないでしょ？」

「ない」

朱善の即答に、それが生きてる価値なものね、と柚香は受け入れて頷いた。

「そのくらいの奇跡が起きなきゃ、祐喜は信じないわ」

「そう考えると、柚香は素直なのだな 私をこうして視るし、『紅葉山』を受け入れて生きている。現代のひとの子とは思えぬ清らかな心の持ち主ということだ」

「褒めてるのかなあ？ 馬鹿にしてるのかなあ？」

「ほ、褒めているのだ！」

朱善は慌てて言葉を改めた。

「私は十六年の人生のうち、半分以上を『あぶらあげ』と生きてきたのよ。清らかとかじゃなくて、習慣や刷り込みっていう方が正確かもしれないわね」

「今の『柚子』は先代から『紅葉山』への思いを継承する間も与えられなかったからな……。それも原因なのだろうか」

柚香が『紅葉山』の器となったのは、二歳である。

まだ己の意志というものを持たない赤子だった。

自分の中に別の『何か』がいることは、柚香にとっては当然のこととで、逆にそれが無いという生活は知らない。

柚香にとつては稲荷神たちと一緒に暮らすことが日常なのだ。

だがしかし、その日常が揺らぎ始めている。

稲荷の世では『紅葉山』の不在が発覚して騒ぎになりはじめている。

朱善は今日それを告げに来たのだ。

柚香の中に居る『紅葉山』を、不心得者に奪われてはならない。

「でも、他の稲荷神達が気づく訳ないわ。『あぶらあげ』は私の中で懇々と眠り続けて目立たないし、唯一ひとの子として接点があった『柚子』の祐喜がぁんだけ無信心なんだもん」

「そうだな。まさか膝元の 一見無関係なひとの子の中におられるとは、兄弟たちも思わないだろうな」

「そうよ。それに万が一、ここにすることがばれてしまっても、私が絶対に返さない」

朱善はじつと柚香の黒い目を見つめた。

神を宿しているからという訳でもないだろうが、柚香はとても美しい娘だ。

伸ばした黒髪に黒い瞳。

生にすぎり、誰かのために懸命になる姿はひとの子らしいと思うし、魂の穢れない様を『大紅葉山』も気に入ったのだとそう考えている。

「『あぶらあげ』を狙う奴らに見つからないうちに、見回り行きましょう」

柚香が歩き出すと、小さく清廉な鈴の音色がする。

柚香の持つ携帯電話につけている、大江山稲荷神社の御守りについた鈴である。

朱善は『大江山』分社身分であるため、その御守りの力もあつてこうして柚香と深い接触ができています。

お互いを強く結びつけるものが多いほど、関係は深まるものだ。

もつひとりの『あぶらあげ』 (2)

「今日は何を祐喜に作って持っていこうかなあ。山芋の磯辺揚げ、天麩羅でもいいかなあ。ねえ朱善は何が食べたい？」

「そうだな……鮭」

「朱善ってほんと魚好きよねえ。そうだ、ねえ『鮭』って呼ぼうか！ 『あぶらあげ』みたいに」

「そういう蔑称は嫌だ。名前で呼ぶことを許すと言っているのにどうしてお前たちひとの子は、次から次へと俗称を付けて回るのか」「名前を呼ぶのを許す……って偉そうに言われても。『大江山』分社、って長いし呼びかけにくいのよね。早く朱善も山を預かって、立派な山の名前で呼ばせて頂戴ね」

「だから、私は『紅葉山一ノ宮麓』だと何度説明すれば分かる！」

「『紅葉山一ノ宮麓』、かあ……。それも長い。それに自称なんでしょ？ 『あぶらあげ』が任命しなきゃだめだって言ってたじゃない。見習い中ってことでしょう」

歩きながら路地を抜けると、表参道に出る。

「『大紅葉山』公認でなくとも、思い姿勢を貫けばいつか必ず本懷を遂げられるというものだ」

「そうね。私をこうして守ってくれてるのは『あぶらあげ』に認めてもらうためだもんね」

「もちろん、それだけではないぞ！」

「ちゃんと『あぶらあげ』が目覚ましたら、朱善は『あぶらあげ』の願いを果たすために尽力してくれましたって言うわ。そうしたら、よくやった！ お前を私の侍従に命じよう！ とか言ってくれるかもね」

柚香が任命してくれても一向に構わないのだぞ。お前は『紅葉山』なのだからな。

朱善はそう言ってやりたかったが、恐らくこんな調子で任命され

ても心が伴わない。

真まことが得られなければ、どれだけ口上で任命しても意味がないものだ。

「『あぶらあげ』優しいもん、お願いしたら断らないかもしれないし」

すこし前は素直で疑うことを知らなかったのに、柚香は最近口がよく回る。

朱善としては、『紅葉山』の魂の器である柚香を守ることで、『紅葉山』侍従の位である『紅葉山一ノ宮麓』を気取っていることは確かだ。

こうして役に立つことを証明して、認めて貰いたいと思う気持ちはある。

だが稲荷神としての使命だけでなく、柚香というひとの子を気に入っての行動でもある。

『紅葉山』だけでなく、柚香という個人を守りたいと思うのだ。

「柚香、とにかくこちらでは『紅葉山』搜索の動きが活発になってきた。万が一があれば同時に『大紅葉山』のお命に関わる、注意するように」

「分かつてる。朱善こそ気をつけてね」

「私の心配は無用。皆は私が『大紅葉山』の行方を知っているとは思っていない」

「それなら、いいけれど 朱善の気持ちは変わらないの？」

何が？ と首を傾げると、柚香は言いにくそうに溜めてから『あぶらあげ』をこのままにしておくこと、と言った。

稲荷の世が混乱しはじめたのなら同じ稲荷神である朱善は、柚香の中の『紅葉山』を連れ戻す義務があるのではないかと、柚香は思うのだ。

「私は 『大紅葉山』の願いを叶えたい。あの方が望んだことを手助けしたい。私が見てきた侍従というのは少ないけれど皆、主のために命を賭し、心を賭して有り続けている。それを私も見習いた

いんだ」

「じゃあ、もし『あぶらあげ』の気持ちが変わって、私から出てきたくなったら、朱善はどうする？ 私を殺して『あぶらあげ』の魂を稲荷の世界に持っていく？」

本当ならば面と向かって問いかける言葉ではないが、柚香は確認をしておきたかった。

誰にだって事情と立場というものがある。

それは、柚香はよく分かっている。

だから無駄に信用して、裏切られたなどと勝手に思って傷つく前に、線引きをしておきたかった。

目の前の小さな稲荷神は、決して『自分』の味方ではないということ。

朱善はしばし黙したが、今答えられることだけはと口を開いた。

「第一に『大紅葉山』はお心を変えることはない。『柚子』のためにひとの世に降りた。何があるうと『柚子』を愛される心を貫かれる」

じつと柚香の目を見る。

口は良く回るようになったが、不安でたまらないという顔をしている。

まだ幼い心の持ち主だ、自分と同じだ。

「そして私は これでも稲荷神の末弟である。ひとの子の切なる願いを無碍にはしない」

返答こそしたが、曖昧な返事でしかない。

今ここで、全ての思いを発露する訳にはいかない。

朱善の立場は宙に浮いていて、危うい。

朱善自身も、吃緊の事態に陥った時に、動けなくなってしまいそうだと分かっていた。

稲荷神として、ひとの子の願いを叶えるという役目。

稲荷神として、『紅葉山』を救うという役目。

どれも並行して遂行することは、事情を知っている朱善にはでき

ない。

選ぶべき時が来たら、ひとの子か兄か、どちらかを選ぶことになるだろう。

「ごめんね。今聞くことじゃなかったかな。でも　心が決まったら聞かせて。どっちでも私は構わないから」

「そうだな、いつか必ず答える」

いつもの情報共有を終えて、朱善は柚香と別れる。

空に舞い上がれば山の緑、大気、大地ともに全てを抱くことができたが、朱善の青い目は小さな影になっていく柚香だけを追っていた。

柚香だけは、抱くことはできずに目で追うことしかできない。

向こうはこちらの気持ちを知らずに、空に舞う朱善へずっと手を振っている。

その仕草を小さな点になるまで見守る。

今朱善が抱える悩みは、恐らく『紅葉山』も抱えていただろうと考える。

特定の誰かを想うということは、時に苦しい選択を迫られる。

はじめは『紅葉山』の器として、ただ柚香の身の安全だけを見守っていた。

いつしか顔をつきあわせるようになった。

視線を交わし、お互いの世界の話共有するようになる。

祐喜のために料理を勉強していると言って、毒味役を押しつけられるようになった。

自分は鮭が好きだと言うと、翌日「お供え物」と言って鮭の握り飯を持ってきた。

まだ分社身分の朱善が、信仰という名の友愛を持って差し出された初めての供物だった。

不格好な握り飯だったが、朱善はその味を忘れない。

ひとの子の信仰というものは言葉に代えがたい、稲荷神として生きる全てであるのだと学んだ。

いつしか、柚香の笑顔が頭の中から離れなくなった。

そして朱善は、はじめてひとの子を愛する『紅葉山』の兄の思いを理解した。

朱善は思うのだ。それはとても苦しく切ないものだ。

柚香の笑顔は有限のもの。必ず綻び消えてしまふ。それがひとと言ふものだから。

だが稲荷神は無限のもの。ひとの子の信仰がある限り、永劫を生き続ける。それが神というものだから。

有限と無限の相容れないさだめの中で、たったひとつの脆い愛という感情だけで繋がっている。

何と形容することもできない、何と換えることもできない。

かつて『紅葉山』と『柚子』は互いを思い合っていた。

愛する者いるというだけでも幸せであるのに、それ以上の幸せを得ていた『紅葉山』は奇跡を得ていたのだ。

『紅葉山』の兄は幸せで、そして不幸だ。兄はひとの子の世において、十四年前に愛する『柚子』の死を知った。

愛するものの死。

途切れなく続いてきた『柚子』の家系、血脈などという物質的な死だけではない。

現代の『柚子』が『紅葉山』を否定することで、精神的な『柚子』の魂も死を迎えた。

『紅葉山』が心を砕くべき相手は、舌に乗せた落雁のように溶けてなくなってしまった。

無限と有限を繋いでいた線は途切れ、永劫の闇に落とされた。

だが『紅葉山』は有限の世界に一本のこよりを垂らした。

『柚子』に届くようにと、小さいながらも光放つ、柚香と言う名の媒介。それは線香花火のように華奢で脆い命の炎。

柚香という花火が消えてしまえば、『紅葉山』も共に消えてしまふ。

それほどの覚悟と愛を持って稲荷の世を生きるものがどれだけい

ることだろう。

ひとの子の世にもいるのかどうか分からない。

柚香はそれを「報われない」と言った。

事実、このままでは『紅葉山』は確実に死ぬ。

柚香の中の『紅葉山』を『柚子』は視ることなく、外側の柚香だけを視ているにすぎないのだから。

柚香はこれまで、懸命に『柚子』に信仰を取り戻させようとしたが、それも叶わなかった。だからこそ今『紅葉山』は宿主である柚香の問いかけにも答えられぬほどに小さく消えそうになっているのだ。

叶うわけがないと分かっている、朱善は願う。

「どうか『柚子』が『大紅葉山』を信じ、長き勤めを果たした柚香に、褒美として生きる力が与えられますように」

そうすれば全てが酬われると朱善は思う。

「そして柚香が、ひとの子として生き、死ぬまでを、私は見守りたい」

朱善は、自分の気持ちに気づいていた。

これは　柚香へ寄せる、愛なのだと。

彼の取り戻し方（1）

その晩朱善が『大江山』本殿へ続く石段を上がると、侍従の茂野と顔を合わせた。

彼は主である銀朱に忠実な老臣で、朱善たち分社らの教育係でもある。

明確な嫌悪を向けられても顔色を変えることなく黙々と作法を教え課題を与えるので、妹の祥香の茂野嫌いは加速している。

しかし祥香に散々言われた後、台所でひとり寂しそうにしていた姿を朱善は目撃していた。

新巻鮭をこつそりとつまみ食いの最中であつたので、声をかけることはできなかったのだが、寂しげな背中を見た時に、朱善は侍従職の困難さを思い計つたのである。

「本殿には上がらず、そのまま奥座敷までお回り下さい。暫く本殿への立ち入りは禁ずるように命じられました」

闇をほのかに照らす提灯を掲げ、茂野の白髪交じりの黒髪が照らされる。

「何かあつたのか」

問うと、本殿にはひとの子がいると言う。

希有なことであつた。

表裏一体であつたとしても、ひとの子がこの世に器ごと身を置くということは稀なことだ。

まさか柚香が捕らわれたわけではなからうかと茂野を押し切つて本殿覗くと、そこにいたのは『柚子』である祐喜だつた。

無様にも銀朱に踏まれて呻いていた。

「『大江山』のお姉様は『柚子』を捕らえたのか？ 何故……どうやって？ 『柚子』は我らが視えないのではなかったのか？」

「あれが『大江山』の護符を持つておりました。強い力が込められておりそれによって『柚子』は我らを視る力を一時的に得たような

のです」

それは偶然の出来事だったのだろうか、銀朱はその一瞬を見過ごさなかったのだ。

「お姉様の護符を？ 無信心の『柚子』が何故持っている。おかしいだろう」

「さあ、たしかに本人のものではないようです。誰ぞ懸想しているおなごの持ち物であると言っております」

朱善は茂野の言葉にすぐ柚香の姿が浮かんだ。

柚子が携帯につけていた御守りに違いない。どこかでそれが、祐喜の元に渡ったのだ。

「『柚子』を用いれば、行方不明の『大紅葉山』がお応えくださるに違いないという、銀朱様のお考えです。ですが『柚子』は我らに對して毒を放ちます。祥香様と朱善様には毒に触れないようにとのご配慮です。さあ奥へ」

「だが『大江山』のお姉様とて、あれほどの毒を直接受ければ苦しかるう。止めさせるべきだ」

いつもなら清廉な空気をたたえる本殿は『柚子』の不信心の穢れ、否定の毒で真っ黒に煤けて見える。

それは『紅葉山』を蝕んだものと同じ。

彼等には毒だった。

「私も進言いたしました、『柚子』は本殿から出すなどのこと、必ず屈服をさせるおつもりの方です」

「無駄だ。今すぐ止めさせねば……」

「私に出来ぬと思うか朱善。お兄様の事で私が膝を折る事は断じてない」

背後から銀朱の声がした。

茂野と朱善は深く表を下げ、『紅葉山』からの帰山報告を告げた。『『柚子』を『紅葉山』においておく方がずっと毒になる。お兄様がお戻りになった時、ひとの子の穢れにまみれた山にお戻り頂くのは忍びない。そなたが日々『紅葉山』に通うのを黙認するのも、穢

れを払うためだ。さすがお兄様の『紅葉山』だけあって穢れは最小のままで、放置を続けては汚れが溜まる」

穢れが拡大しないのは、銀朱が言うように朱善が徘徊している成果でもあるが、『紅葉山』である柚香が山を欠かさず巡っているからなのだが、朱善がそれを言う訳にはいかない。

『大江山』は『紅葉山』を強引に稻荷の世に連れ戻そうとしている。

そうする事でひとの子が　柚香が死ぬとしても構わないのだ。

恐らく構う事もないだろう。

銀朱は『紅葉山』を深く敬愛している。兄を取り戻す為なら犠牲を厭わない。

「『柚子』が信仰を取り戻せば、お兄様は必ず反応を見せてくれるはずだ」

銀朱は汚れた打ち掛けを脱ぐと、穢れを叩き落とし座敷へ入り一服のために煙管を手にした。

翻った長い銀朱の髪が煌めき、星屑となって広がる。

「お姉様、『柚子』を『紅葉山』の里に戻しませんか」

「話を聞いておったか？　あれに信仰を取り戻させる。そしてお兄様を呼ぶのだ。そなたはお兄様に戻ってきて欲しくないと、そういうつもりか？」

銀朱が手にしていた美しい白磁の茶器に、ひびが入る。

その亀裂は座敷全体にも入り空気がぐつと冷えた。

「『大紅葉山』は思慮深き御方です。突然姿を消すということには意味があつてのことで、無理に引き戻すはお望みではないのでは、と……」

「どんな意味があるというのか。そなたはまだ分社身分で分からぬのだろうが、お兄様の気配は完全に途絶えておるのだぞ。遊山しに山を抜けておられるのは訳が違う。存在そのものがないこの異例にのんびりと構えておられるか」

「それでも、待つことはできないのでしょうか」

銀朱はさつと立ち上がると、怒気の孕んだ表情で朱善を見下ろして懷の扇をつきつけた。

「私は『葵山』時雨様から、お兄様のことを頼まれていたのだぞ。もしこのまま、お兄様にまさかがあれば、私は時雨様に顔向けできない。それにお兄様が居なくなったら」

怒っていたはずの銀朱は、突然青い目からぼろりと真珠のように小さな雫を零した。

姉であり母である銀朱に涙を流させるということが、どれだけ不躰なことだかは分かつていたが、朱善はぐつと堪えて進言を続けた。
「ですが、『柚子』は　ひとの子に我らは触れてはならないものです。もしお姉様に何かあればその時こそ『大紅葉山』や『葵山』が悲しみます」

「黙れ！　お兄様の身に何かあつたら、『紅葉山』派の大事であるということが分からないほど幼いかそなた。『紅葉山』のお兄様が不在となれば、空席を埋めるのは自分であるなどと、逆徒のような考えを走らせているのではないだろうな」

「それは、あんまりのお言葉です」

「この一件、『豊山』派の暗躍も考えられる。二度と下らない進言を致すな」

「ですが『豊山』派が動いてのことであれば、何かしらこちらに宣告がありましょう」

「何も音沙汰がないから、お兄様が無事であるという確証はなからう。そなたには難しすぎる話よ。下がれ」

「どうか『柚子』をひとの里にお戻し下さい。お姉様の命を蝕みます。そして、我らにとって無価値なものでも、あれを愛し求めるものがひとの子の里にはいるはずですよ」

「……茂野、朱善を」

頭痛がするという仕草で手を振ると、控えていた茂野が立ち上がり朱善の退室を即す。

だが朱善は茂野の勧めには応えない。

「私の言葉に、間違いはありますか。別の方法があるはずですが、お考え直し下さい」

「その頑固なところは誰に似た。もういい。下がれと言ったら下がれ」

それでも朱善は動かない。

大きなため息を零して銀朱の方から部屋を出て行った。

一度も振り返ることなく消えていく銀朱の背を見つめ、朱善はぎゅっと手を握りしめた。

彼の取り戻し方（2）

夜、雨の中。

柚香は守るべき『柚子』祐喜の姿を探していた。

『紅葉山』を抱いているとはいえ柚香はひとの子であるから、気配を追うなどという芸当はできない。

地道に聞き込みをして探すか、魂の中の『紅葉山』に問いかける他にない。

『紅葉山』であれば愛しい『柚子』の場所を探し出す力があるはずだ。

しかし何度呼んでも、『紅葉山』が答えることはない。『紅葉山』の魂はひとの子の穢れに犯され、もう虫の息に違いない。

その事実が柚香をさらに焦らせる。

彼が消えてしまったら、自分の命をこの世に繋ぐ線が途切れるだけではない、この山の主が消えてしまう。

愛する紅葉山の里が寂れ廃れてしまう。

それは『紅葉山』の器として、彼の意識を共有した現人神としても忌避すべきことだった。

「私じゃ紅葉山を守ることも、祐喜を探し出すこともできないよ。お願い私に力を貸して」

呪文のように独り言を続けていると、ふと心の隅を引かれる感触がした。

「……『あぶらあげ』？」

それは『紅葉山』の鼓動に似ていた。

暗証番号を確認するかのように、柚香はもう一度名前を呼んだ。

「『あぶらあげ』」

だが呼びかけた声は、声色を変え心の中で反射した。

誰かも同じように、彼を呼び共鳴したのだろうか。

聞き覚えがある少年の声。

目下搜索中の、『柚子』である祐喜の声だった。

「聞こえるか 『あぶらあげ』」

「何今の、祐喜が…… 『あぶらあげ』を……呼んでる？」

天地がひっくり返ってもあり得ないことだと柚香は思っていた。

彼が神頼みなどする性格だとは思わない。ということは、よつほどの窮地にあると考えるべきかもしれない。

柚香はもう一度声を求めて意識を集中する。

だが、祐喜の声はもう聞こえない。

代わりに柚香の中から光が溢れ、軽い目眩を与えた。

柚香を振るわせたのは、 今度こそ『紅葉山』だった。

数年ぶりに柚香の前に姿を現した『紅葉山』。

秋の稲穂を模した金色の豊かな短髪は、暗闇の中でも目映く、立体映像のようにして柚香の前に浮いている。

雨粒は『紅葉山』を投下して落ちている。

薄膜に映し出された映像のようだが、立体感と共に柚香には質感を感じた。

数年ぶりに視る姿だった。

「『あぶらあげ』……！」

濡れるを構わずに、傘を落とし柚香は陽炎のような『紅葉山』を掴んだ。

「大変なの！ 祐喜が居なくなってもう二年も帰ってこないの。警察はもう諦めてて、秋津のおばあちゃんもどうしようもないって、私も、もうどうしていいか分からなくて。ねえ『あぶらあげ』なら祐喜の居場所を……」

柚香はまくし立てるように説明をして、一息ついたところでやっと目の前の『紅葉山』を見た。

降りかかる雨の冷たさに、冷静さを取り戻させたわけではない。

目の前に浮かぶ『紅葉山』の様子に、違和感を感じたからだだった。

「『あぶらあげ』……？」

白磁の肌は夜の闇を吸って青白く輝き、陶器のようにも見える。

紅玉の瞳は半分も開いていない。

桜桃の色をした小さな唇は、虚空を見つめている。

そう、視線が柚香に合っていないのだ。

いつもなら、姿を現してすぐに微笑みかけて優しく話しかけてくれたが、それが無い。

ただ空間に浮いているだけだ。

柚香は恐ろしくなって、添えられていた手をぎゅっと握りしめて声を上げた。

「『あぶらあげ』しつかり！」

強い思いを込めたその言霊に横顔を叩かれ、やっと『あぶらあげ』は柚香を視た。

気怠げに閉じかけている目が、ほんの少しだけ開いたように見える。

柚香が懸命に求めていた助けは耳に入ってはいないようだった。

「……ゆ……か……」

やっと返ってきた声も、気怠げで明瞭さにかけていた。

「『柚子』が、私を呼んだような、気がしたのだ……」

か弱い体に鞭を打つような仕草で、『紅葉山』は白い手を額にあてた。

「私に声を……かけてきたような気がして……」

柚香はその言葉に、『紅葉山』の着物を掴んでいた手を引いた。

今まで形を取ることもできない瀕死状態だったにも関わらず、なぜ突然具現化したのか。

『紅葉山』の最愛の子『柚子』が呼び、彼がそれに答えたということだ。

柚香はやっと『紅葉山』が形をとった理由を理解した。

自分の必死の呼びかけによってではない、どこかにいる祐喜の声に反応したのだ。

「……祐喜の呼び声は、聞こえてたのね」

意気消沈とばかりに声の張りは失われ、柚香は項垂れた。

様子がおかしいのは目覚めたばかりの『紅葉山』にも分かる。そつと柚香へ手を伸ばした。

「濡れる」

いくら手を翳しても今の『紅葉山』が傘代わりなどはできないのだが、柚香はその行為に涙が落ちそうになった。

彼は自身の魂を守る器として、体を心配してくれている。

決して、『柚子』に向ける愛情と同じ感情で心配してくれているわけではない。

胸が苦しくなった。

どれほど頑張っても、柚香は『柚子』にはなれない。

どこかで、自分が『柚子』になれるような気がしていた。

人生の半分を賭せば『紅葉山』が自分を『柚子』として見てくれることがあるのではないかと思っていた。

不信心の祐喜を忘れ、新しい『柚子』として見てくれれば、新しい関係がはじまるのではないか。

なんて そんな、夢物語だ。

どこかで理解していたのだ。

朱善も明言していた。

（『紅葉山』はお心を変えることはない。『柚子』のためにひとの世に降りた。何があるうと『柚子』を愛される心を貰われる）

でも。

それでも。

胸がざわつく。

雨の冷たさも感じられない程に混乱する。

「傘を持て、風邪を……ひいてしまふ」

涙を落とすのを飲み込み、落とした傘を言う通りに拾う。

雨を浴びてしつとりと濡れた黒髪を、『紅葉山』は撫でる仕草をした。

「背が伸びたな」

喉から声を出そうとすると、嗚咽混じりになりそうで柚香はただ

首を縦に振った。

それから下を向いたまま、喉を押さえて声を絞り出した。

「だって私もう、十八歳だもの。すぐ成人して……大人よ」

「ひとの子というのは、本当に瞬きの間に強く目映く、線香花火のように生きるものだな」

『紅葉山』は本当に愛おしそうに、開ききらない目を細めて笑った。

『紅葉山』にとって、ひとの子の命とは線香花火と同じだ。

そつと紙^{こより}縊を摘み暗闇に垂らす。

火を孕むと火薬が紙の先を駆け上がり、まず牡丹と呼ばれる玉を作る。

指の先に伝わってくる微震は産声に似て、やがて松葉と言う絶頂がやってくる。

小さな稲光を無数に放つそれは、ひとの子の絶頂。

一瞬を、力強く、迷いながらも、一人一人違う輝きを放つ。

ほつと感心して見ていると、やがて天地も構わず咲き誇る火花は弱々しく地へ垂れ、柳と呼ばれる火花をちよろちよると放つ。それは老いへ向かう疾走である。

老成をし、最後は散り菊を迎える。

ぽつり、最後に紙縊から玉が落ちれば、光は潰える。

ひとの子の死がそれだった。

『紅葉山』はひとの子が命を燃やす、松葉が好きだ。

自身が、有限であることを知って居る。

だからこそ常に必死になり、変化しようとする。

その様が見事だと思うのだ。

「線香花火だなんて……短すぎるよ。それって『あぶらあげ』がそのまま私の中に居続けたら、貴方はすぐに消えちゃうって事よ」

「承知の上での事だ。『柚子』を失ったままあり続けるより、ずっと意味がある」

(駄目)

そんなのは、駄目だ。

柚香はまだ十八歳で、未熟だが『紅葉山』というものがどれだけ大事な存在か知って居る。

自分の命と一緒に消えてしまつてはいけない存在だということくらい分かる。

消えてしまふならば、自分だけでいい。

「駄目よ『あぶらあげ』、消えたら駄目。消えたら嫌。なにを変えても祐喜に貴方を視てもらうわ」

「柚香」

「『あぶらあげ』は、祐喜に視て欲しいよね、直接触れて、振り向いて欲しいよね」

柚香は、分り切った質問をしたと分かつていながら顔を見た。「それが叶わないとしたら、私はあなたの『柚子』にはなれないの？ 祐喜じゃなきゃ駄目なの？」

柚香の本当の気持ちは、『紅葉山』には届かなかった。

抱きしめていた感覚はもうない。

柚香は雨を抱くように、暗闇に手を放り投げていた。

ざあざあと雨足は酷くなつていく。

柚香は暫く身動きが取れなかった。

『紅葉山』に残された時間はもう少ない

柚香は自然とそれを悟った。

あるひとの子の最終決意

「最近顔色悪いけど大丈夫ですか？」

「幼なじみが失踪しちゃってね。色々大変なの」

当然のこと、柚香には日常がある。

夜は祐喜を探し、昼は学校に通わなければならない。

柚香の通う高校は都心にある。私立で制服が可愛いことで有名な
基督教系の学園で、かつては華族の通う名門だったそうだ。

今でもお嬢様は通っている。

柚香の隣でお弁当を広げている同級生、天上藍てんじょうあゐはその典型だった。
両親は九州で会社をやっている社長令嬢とかで、通学は必ず車。
しかも運転手の男性二人は若くて格好が良い。

柚香は運転は一人しかできないのに、なんで二人もついてくるの
か未だに分からない。

金持ち主張なのか、それが上流社会というものの習わしなのだろ
うか。

一般家庭の柚香にはそのあたりがよく分からない。
もつと言つとんでもない田舎から通っている柚香と、海の近く
の洒落た邸宅に住む同級生の藍。

柚香には知り合ったきつかけがよく思い出せないのだが、仲の良
い友人の一人だった。

「まあ。まだ見つかつていないの。親戚の方でしたっけ」

「そう、遠い親戚なんだけどね」

「その方、柚香さん好きな方でしたっけ？」

さりげなく誘導しようとしたので、柚香はせっかく作ってきたお
弁当に緑茶を吹きかけた。

「やだ、それも食べれませんよ」

「藍が変なことゆーから！」

「私のお総菜お分けしましょうか。美味しいですよ。三枝みえぐささんが作

って下さったの」

「三枝さんて、運転手だけじゃなくて家政婦もするの？ なんでもできるのね」

藍のお抱え運転手の片方の三枝とは、柚香も何度か話をした事がある。

爽やかな青年で人当たりがよい男性だった。

藍にお弁当を持たせる姿はあまり想像できない。

「今時そのくらいできなくては。で、話は逸らさないで下さいね、柚香さん」

「逸らしてないし、好きじゃないよ。年下だよ年下！ 生意気なところあるし」

「柚香さんは年上が好みだったものね」

中庭に設置されている鉄製の椅子に並んで座っていた二人は、その後暫く無言で弁当をつづいていたが柚香が視線を投げると、藍はにこにここちらを見ていた。

彼女の目はどこからどう見ても、祐喜との関係を疑っているように見えた。

だが口を開くと違う話題だった。

「ね、柚香さん。今日の現国で夏目漱石の『こゝろ』、最後まで読み終わりましたね」

「うん。中学の時に最初の方だけやって、もやもやしてたのよね、引きに引きまくって、ああいう終わり方だったとはね、鬱よね」

柚香の弁当箱の蓋に、藍はお弁当の煮物を分けてくれる。

手の込んだ総菜で、手間暇掛けたのが分かる。

「あら、柚香さん全部読んでなかったんですか」

藍は本を読むのが好きで、時間があれば図書室にいる文学少女だ。そしてまた読む姿が様になっている。

もらった煮物を口に運びながら、藍の言葉と煮物を咀嚼する。

「あの話って、典型的な三角関係よね。私は圧倒的に『先生』派だね、柚香さんは？」

「うーん、あの三人は誰も彼も、微妙かなあ」

主格たる登場人物は三人。

『先生』、『K』、『お嬢さん』。

『先生』と『K』はお嬢さんに恋をする。

だが『先生』は『K』が『お嬢さん』を好きだと知りながらも、『お嬢さん』を先に奪う。

それを知り『K』は失意で自殺する。

『先生』は精神的な混沌に落ち、最後は話の進行役の「私」へ全てを手紙に書き記し、時代への殉死を決行するのだ。

「『先生』は罪悪感や嫌悪感に苛まれましたけど、自分の恋心に嘘をつかなかったのだから、胸を張るべきだと思うの。どうせ苦しむのならば、私は恋を選ぶべきだと思います。もし『K』にお嬢さんを譲っていたらどうなったと思います？」

藍は私はこういうもしもを考えるのが好きなの、と例えの展開を即した。

桃太郎がもし梨太郎だったらどうなのかしら、とかアンパンマンがクリームパンでない理由とか。

どうしようもないことを気にするので、もれなくその他大勢から、天然お嬢様の烙印を押されている。

「私は……どうかな、友人の『K』をを取るべきだったと思う」

「どうしてですか？」

「なんでだろ……恋も友情もさ天秤にはかけられないと思うけど、恋は怖いから」

藍は話と箸を止めて、またじっと柚香を見る。

「なに？」

「柚香さんは怖い恋をされてるの？」

お茶を口に含んでいたらまた吹き出したに違いないが、今度は藍が状況を読んでくれていたのだろう。

口の中には何も無い状態だった。

「親戚の方じゃなくて、別の方でも、いるんでしょう、好きな方！」

「いや、してないよ　恋なんて。そんな暇ないし」

「興味、ないのですか」

「ないよ!」

「私の勘では、親戚の方と関係あるような気がしてるんですけど。ずばり三角関係です。『ころろ』のように」

ただ自分の妄想の話に繋がりたいだけなのかもしれない、と柚香が思ったところで藍は再びこちらに視線を投げた。

「本当の本当にいらつしやらないのですか」

「恋って……分かんないな。執着とも言えるし、狂気とも言える」

「柚香さんは傷つきたくないだけなのかもしれませんよ」

「……そうかも、うーん。そうだね」

「ほら、柚香さんすぐ顔に出るんです。やっぱり恋をして、悩んでらつしやるんでしょう」

「藍は……好きな人いるの?」

「いますよ」

「あのお抱え運転手のどちらか?」

柚香の質問に、柚香は目を丸くしてから腹を抱えて笑った。

「柚香さんて本当にこういうことは鈍いんですね。あの二人はそういうのじゃないです。向こうはそういう目で見て居るかもしれませんけど……ふふ、私、思われ役の『お嬢さん』ですね」

予想外な発言をしたが、藍はお金持ちのお嬢様だ。

逆玉の輿を狙う男がいてもおかしくない。

「あの色黒の人格好いじゃん。波乗りしてそ……」

「蜜条さんのこと?　蜜条さんて海は苦手なのよ。でも、三枝さんが聞いたらがっかりされるわ。柚香さんのこと気に入っていたみたいなのに」

「えっ、な、なにそれ」

「本当ですよ、気づいていなかったんですか。まんざらじゃないなあって思っていたのに」

「いや、私はなんていうか親切な人だなあって、それだけだよ!」

「嫌だわ、もつと三枝さんに積極的に声をかけるように言っておきます」

「も、もうやめてよー無理だよ私には。それより藍の方こそ話変えないでよ、藍の好きな人は？」

「私の好きな方は、今遠くにいらっしやるんです」

「遠く？ 仕事してて海外にいるの？」

「許嫁でしたけれど、色々な事情があつて、もう今までの関係には戻れないかもしれません。もう無理だつて父にも言われてます」

「ちゃんと戻つてきて貰おうよ」

「もちろんです！ 私はそのためなら、何だつてしてみせます」

藍の言葉は力強かった。黒目には強い輝きがあり、柚香を魅了する。

恋を自覚した人の強さはすごい。

柚香は純粹に感動し、今の素直な気持ちを藍に託すことにした。

「藍の勘は当たつてるよ。今行方不明の親戚の子を、私が大事なひとが好きなの。つまり三角関係。そうだなあ立場で言うなら私は、

『先生』かな。好きなひとは『K』」

「それだと、『K』は一番先に死んでしまいますけど」

「その通り。『お嬢さん』が好きで、今にも『K』は死にそうよ」

柚香は自分の配役にそれぞれを当てはめて、どこか疲れたため息を零した。

「私はね、『お嬢さん』も『K』どっちも好きでね、どっちも傷つけたくないし、失いたくない。だから動けない。でも選択の時は迫つてきてる」

藍は興味津々で、すでに食事の手は完全に止まっている。

「書物は時に、ひとの生き方を示すと思います。柚香さんは『K』にはなつてはいけないわ」

死んではいけない。

それは物質的な話ではなく、恋を諦めてはいけないという意味で藍が使ったのだと思いはしたが

柚香にはそれがぴたりと自分に当てはまった。

「私の考えを言わせて頂ければ、柚香さんみたいに可愛くてしつかりものに振り向かない『K』も『お嬢さん』も諦めてしまえばと思いますけど。ねえ本当に三枝さんは駄目なんですか？」

「だ、だから、私そんなに器用じゃないんだってば……簡単に好きになつたり、嫌いになつたりできない」

「柚香さんて、本当に真面目。でも……そこが、弱さで、良さでもあるのかもしれないね」

よっぽど落ち込んでいるように聞こえたのか、藍は柚香の手を両手で包み込みぎゅっと握りしめた。

目は真剣で、唇をぐつと噛んでいる。

「私で力になれることがあれば、なんでも言つて下さい」

柚香は藍の言葉に、ぎこちない笑顔を浮かべて頷いた。

「じゃあ、神頼みをお願い、多分それが一番力になる」

「いいですよ。私も柚香さんとお揃いの御守りが欲しいから、『大江山』にお参り行きたいわ。無くしてしまわれたんでしょう。お揃いのもの買いませんか？」

「いいね。じゃあ来週に大江山食べ歩きしようか。前に大江住んでいたし案内できるよ」

「本当に？ 楽しみにしています。蜜条さんや三枝さんにも黙ってお出かけにします」

運転手なしで、山道の大江山を楽しむことができるかは分からないが。

「あ、でも三枝さんが付いて来たがったら、連れてきてもいいですか？」

「駄目っ！ こんな話聞いてまともに顔見れるわけないでしょ」

柚香が激しく抵抗するので、藍は残念そうに舌を出した。

藍は藍なりに、一つの選択肢しか見れない柚香のために、新しい視野を提供しようとしてくれているのだろう。

だがその提案にのってしまつては柚香は根本から『紅葉山』との

約束を反故にすることになる。

それだけは、はつきりとしている。

（結局のところ、私は、『あぶらあげ』だけじゃなくて祐喜も救いたいんだろうな……）

人の欲は深いな、と朱善に言われそうだと思い、自嘲する。

藍からもらった総菜を口に運び、昼食を終えて立ち上がるに合わせ、柚香は気持ちを定めた。

（全てを丸く収める力は、私にはないんだ。多分鍵を握っているのは、祐喜）

奇跡に生かされた少女は、奇跡を信じられない少年に全てを託すしかないのだ。

大事なひとと、自分の命を。

（不安に惑わされないで、傷つくことも失うことも怯えてはダメだ）
誰でもない柚香の力で祐喜の信仰を取り戻させる。

それがとても困難なことであっても、柚香ならできるはずだった。
（目に見えないものでもしっかりと信じて行かなくちゃ、なにも為せない）

それでも、その先に希望があると信じるのだ。

そうしたら、たくさんの笑顔が見ることができる。

柚香はそつと胸に手を当てて、『紅葉山』の鼓動を探った。

確かに感じる息吹に、柚香は気を引き締めた。

ある神の子の最終決意（1）

その晩朱善がやってきて、とんでもない報告をしてきた。

「大江山に祐喜がいる？」

「そうだ。『大江山』のお姉様は『柚子』を屈服させ、信仰を取り戻させることで『大紅葉山』を稲荷の世に戻そうとされている」

雨の日、祐喜は『あぶらあげ』を呼びそれに彼は答えた。

あれは銀朱による策だったのだ。

このままでは祐喜は真実を得ずに『紅葉山』と対峙することになる。

「だめよ、そんなのは、だめだわ。祐喜は銀朱によってじゃなくて、『あぶらあげ』によって信仰を取り戻すべきなの」

確固たる意志を持って朱善に語る柚香に、どこか冷静さを持ったまま朱善は答える。

「『大江山』としては決して間違った行動ではないのだ。むしろ『大紅葉山』のなんたるかを理解した方法だろう」

「それは、そうかも知れないけれど、『大江山』銀朱だって稲荷神でしょ、ひとの子の祐喜になんてことするの」

「それは私も、『大江山』のお姉様に申し上げた」

「それなのに、分かってくれなかったの？」

「……すまない、私の説得は『大江山』のお姉様には通じなかった」「そうよね……分かってくれないでしょうね」

柚香の一言が朱善にはとても引かなかった。

「私は精一杯抗議した。だが意志は固かった。柚香が『大紅葉山』が思うのと同じように『大江山』のお姉様も『大紅葉山』を求めておられるのだ」

「分かってる」

柚香は朱善が説得を怠ったとは思いたくない。

それに稲荷には稲荷の事情があることは知っている。

柚香は冷静になろうと努めるために、淡泊な返答しか返せなかった。

朱善は幼い頃から柚香と稲荷の世の架け橋になってくれたし、同盟者ではあるがまだ彼がどちら側につくかどうかは聞いていない。彼が『稲荷側』の存在ならば、来るときが来たと思うしかない。責めることもできない。

「柚香」

「何？」

「どうして私の目を見ない」

こんな時に何を言っているのか、柚香は眉間を歪めて朱善を見た。「今の私と朱善の関係で、これ以上どう反応しろっていつの？」

柚香はつい声を荒げてしまった。

「柚香……」

朱善も柚香の気持ちが不安で激しく揺れているのは分かっていた。自分の心にあるこの愛の形を貫いていいものなのか、朱善はまだはつきりと見えていなかった。

その小さな迷いは、神経過敏になっている柚香にはすぐに伝わってきた。

「ごめんね。言い方きつかったね。それで『大江山』のどこに祐喜はいるの？」

「本殿にいる。一ノ宮だ」

すぐにでも大江山へ向かい、祐喜を助け出さねばならない。

だがその足を鈍らせるのは、朱善が説明する『大江山』の実体である。

稲荷の世においての『大江山』というものは非常に堅牢である。原生林を山腹に抱く『三ノ宮』、周辺高地を監視するように広がる『二ノ宮』、笹原を頂上に冠する稜線『一ノ宮』。

その全てを統治する稲荷神銀朱は侍従茂野、そして知略の山ノ狐、荒くれの妖狐を抱え、鬼、物の怪を退ける強靱な山ノ狐たちを抱えているという。

山の規模は『紅葉山』と比べ小さい。

小さいからこそ、包囲網を敷かれれば、すぐに捕らわれてしまう。「作戦を練らねばならない。『大江山』のお姉様の気を逸らさなければ、一ノ宮本殿に捕らわれている『柚子』を救うことはできない」朱善がそこまで説明したところで、急に足を止めた。

「どうしたの」

「なにか、いる」

「誰？『大江山』の誰か？」

「いや、違う」

いると言われて柚香は焦って参道周囲を見回した。

静謐な空気が佇んでいるだけで、何の違和感もないように思える。だが改めて意識を尖らせると、虫の音が止んでいることに気づく。「……じゃあ誰がいるっていうの？」

その柚香の声を合図にしたかのように、竹藪から音を立てて何かが飛び上がった。

柚香の目が捕らえたのは、黒い影だけで形などは分らない。そのまま飛びかかってくる殺気だけは分かってても、できることは身を固くするだけだった。

その柚香を守るように、朱善が護身刀を煌めかせ一刀両断にする。手応えはあったが、影はすぐに朱善たちと距離を取りふたりを囲む。

影の数は五つで全身真っ黒の装束。闇に浮く月のように、額に金色の狐面を掲げていた。それだけで体躯や表情は読み取れない。

それどころか影は切り裂かれた肩の傷をぱっかりと開き、その傷に気を止めるようすすえない。

瞬時にそれらが、容易に対処できるものではないことを把握し、朱善は柚香を背にして警戒を強めた。

「柚香、里まで逃げろ」

「そんな、無理……！」

迷う柚香の思考を邪魔するように、突然心にざわめきが立つ。

心に直接介入してくる。

この感覚は前にもあった。

祐喜だ。

「あ……や、だめ」

祐喜が『紅葉山』を呼んでいる。

「柚香？ どうした」

朱善の声が遠くなる。

「祐喜、祐喜が『あぶらあげ』のこと、呼んでる」

前回よりずっと深く、柚香の心の奥に眠る『紅葉山』を揺り動かす。

「祐喜、やめて……、それじゃだめ、だめ……銀朱に言われて、じや、だめ」

「『大江山』のお姉様に屈服したのか、『柚子』……」

朱善の言葉に柚香はぎゅっと胸を押さえて声を上げた。

「銀朱に力を貸してはいけない！」

心の奥の『紅葉山』を呼び起こす祐喜の声を、強制的にはじき返す。

「やはりそのひとの子、『大紅葉山』を秘めておるな」

影が声を上げるので、朱善は刃の切っ先を差し向ける。

「貴様ら、『大紅葉山』の命を狙ってか。私は『紅葉山一ノ宮麓』。

里のひとの子一人でも怪奇によって失わせるわけにはいかない。退けっ」

「侍従といいつつも詐称じゃ。侍従気取りの稲荷未満、『大江山』の分社」

「もとより『大江山』など畏れに足らず、鬼才の茂野がおらねばただの田舎山」

口々と罵る影に向かい、朱善は威嚇を兼ねて再度一閃した。

たしかに一閃は影を肩から腹まで切り裂いたというのに、やはり退陣の気配すらない。

幻影かと思ったが刀から感じる感覚は、空を切るものとは違う。

物質的にたしかに目の前にあるのだ。

「そなたら、どこの山の密命を受けてきた」

「どこの山も『紅葉山』不在とすれば動くであろうこと、詐称『紅葉山一ノ宮麓』殿は分からぬかの」

「そのひとの子が『紅葉山』であれば魂をくりぬいて『大豊山』に差し出して、お褒めの言葉を預かれようものだ。ありがたきお役目である」

「柚香……」

朱善は小声で背にかじり付いている柚香に声をかけた。

「道を切り開く。走って逃げろ」

「朱善はどうするの」

「私は『紅葉山一ノ宮麓』だ。主の命を守るのが勤め。分かったな」
朱善は刃を構えたまま柚香と走り出した。

即時影は追ってきたが、朱善は身を翻し柚香へ向かう影の壁となつた。

「ここから先は通さない」

ある神の子の最終決意（2）

朱善がその目で見てきた侍従は、姉である『大江山』侍従茂野。そして『葵山』侍従村上の二柱だけであるが、それぞれ知略と経験に富んだ名侍従であると朱善は認識している。

彼らは常に主を守り、その為ならどんな策をも破ってきた。

彼らに劣るようでは、『紅葉山』の侍従など担えるわけもない。

これは試練なのだ。そう肝を据えると朱善は柚香への追撃を阻止した。

だが切つても切つても手応えはなく、影は減るところが増えて広がっていく。

根本を見据えなければ、朱善が浪費する一方だ。

柚香が『紅葉山』であると確信がなかったわけではないようだ、となればいつ襲つてもよかったはず。

彼らはなぜ表参道で柚香を狙わなかった？

仕掛けが裏参道にされていたのか？

だが昼の見回りで怪しい畏の痕跡はなかった。

昼では動けなかった理由があると考えべきだった。

裏参道に入り、律儀に『紅葉山』の領域から出たところで襲ってきた理由は？

そしてこの影たちの増殖は異常だ。何かの術だと考えるべきだ。

朱善の分析が、現状の危機に追いつかない。

朱善のこめかみに振り下ろされる刀影が落ちた瞬間、影に向かつて手水殿の桶が投げ付けられた。

投げ付けたのは当然、柚香である。

「柚香！」

「神社の水が効果ないってことは、穢れや毒の類じゃないのね。私には良くわからないけど水は弱点じゃないわね」

「逃げると言っただろう！」

「ひとりで逃げられるわけないでしょう」

朱善の手を柚香はぎゅっと握り締めた。

その手の温かさは、『紅葉山』と同じだった。

「朱善が例え銀朱の味方でも、いいの。朱善が私を選んでくれなくても、私はこの道を選ぶの、損づくしだっていいの、それでもいいって私が思えることが、一番大事なんだから」

影は追う手間が省けて余裕というところか、距離を詰める様子もなくふたりを見つめていた。

柚香はもう片手に携えていた桶を思い切り投げ付けてから、杓子を手に構えた。

「暗くてよく見えないけど、相手はどのくらいいるの？」

「十五だ。闇に乗じてさらに潜んでいるようにで数が増える」

「せめてもつと明るかったら数も分かるのに」

「そうだな、山の影に入っているから……」

朱善はそこまで言って、月の位置を確認した。

月は上空遥か高く。

表参道に寄って輝いていた。

裏参道は月の光が山に落とす影によってすっぽりと闇に包まれている。

「そうか……もしかすると」

朱善は意を決して柚香を抱き上げると、勢いよく空へ舞い上がった。

「わ、あ、な、何」

柚香は空を飛んだことなどない為、何事かと叫びそうになったが、体制を崩して下に落ちたら即死を免れない。

ぎゅっと朱善を抱きしめた。

影は 裏参道の影に張り付いたまま、追ってこない。

「どういこと」

「あれは恐らく陰陽術の類、影鬼の術。影の中においてのみ、将兵を立て操ることができる術式だ。光の中にあれば畏れるに値しな

「そこで思考を止めるのが、分社前の幼子の思考ということろだ」
『大江山』分社朱善様。術があるなら、術者がいるのです!」

月を背に舞い上がった朱善と柚香の眼前に、突如実体を伴った影が二つ浮いた。

今度は影ではなく両名共、たなびく藍色の袖は豪華絢爛な桃の花の刺繍がされている。

艶やかな狐耳に尾を見れば、高い侍従の位を預かっている山ノ狐であることはすぐに分かる。

「追い詰めて、用意された逃げ道に飛び出して来たところを、叩くのが定石よ!」

両名が振り上げた拳をまともに受けて、朱善と柚香はばらばらに空に放り投げられた。

空を舞う術を知る朱善は良いが柚香はひとの子だ、落ちたらそれで終わりだ。

腕の中から落ちていく柚香を朱善が追おうとしたが、それを向こうが許す訳もない。

「柚香!」

朱善の姿が小さくなりそれを視認する。

そこでやっと柚香は、自分の体がこのまま落ちると、地面に叩きつけられて死ぬということに気づいた。

視界を占める紅葉山の景色が、反転していく。

全身が寄る辺なく空を搔く。

「柚香ああああ!」

「暴れると腕の一、二本はお覚悟頂きますよ」

柚香を救おうとした朱善の手は捕らわれた。

「欲しいなら、そなたにくれてやる!」

朱善の青い目が、闇に浮く炎のように輝くと、振りかざした手は侍従を引きはがす。

柚香を救う方が先決だった。

拘束されていた腕の中から飛び出すと、きつく捕らえられていた腕の骨が外れた。

痛みを訴える左手を押さえ込み、朱善は地表へと吸い込まれる柚香を追う。

意識を手放した柚香は髪をはためかせながら、加速していく。

「追いますか？」

朱善を捕らえていた浅黒い茶毛の肌の侍従は、後を追うことはなかったが、もう一方の侍従は朱善の後を追おうとした。

「必要はないな。追わずとも、あのひとの子は死ぬさ」

「ひとの子を、殺めることになるとは」

「『大江山』分社朱善様がひとの子を支え切れなかっただけで、我らの罪ではない。そう思えばいい」

片方はどこか罪悪感を感じているようで地表へ投げる視線を逸らした。

「これで終わりだ」

どんな神速を持ってしても、もう間に合わないと彼らには計算がついていた。

それでも朱善を追わせたのは、守ろうとしたひとの子の五臓六腑が『紅葉山』の魂諸共はじけて消える様を、朱善の近くで見せてやるうと思つたのである。

そんな残酷な意志と風の抵抗を一身に浴びながら、朱善は必死に柚香との距離を詰めた。

だが柚香の体が地に叩きつけられる距離も比例して近づいていく。

「くっ……っ」

朱善は下唇を噛み、自分の力不足、経験不足を悔いた。

悔いるだけで柚香を救えるのならば、全てを投げうてるとまで思つた。

突然、まだ『紅葉山』が山にいたころの記憶が蘇った。

幼い朱善は、ひとの子『柚子』を特別に可愛がる理由を、幼さもあいまって直球で『紅葉山』に問いかけたのだ。

（特別なひとの子を作ったら、その他大勢のひとの子によくないのではありませんか）

稲荷としての誇りより、なにより、そこにある小さな命の方が、大事だと

必死に歯を食いしばる今の己に投げかけているようだった。

（朱善、そなた鮭が好きだと言っていたな）

（はい、大好物でございます、この間敷島と釣りに行こうと話をしました）

（なぜ、鮭が好きなのだ）

（え？ それは……これまで口にしてきた魚の中で、一番私の口に合う味であつたからです）

（そうだな。そなたはは多くのものを見、感じ、触れて、ひとつ愛するものを見つけたのだ。逆説的に私はこう聡そう。ひとつを愛せぬものが、その他多くのものを愛することはできない）

『紅葉山』は九尾をゆるりと揺らし、暖かな日向に目を細めて続けた。

（私には『柚子』が必要なのだ）

朱善は、風圧に負けないように目を開くと、『紅葉山』の言葉を心でもう一度反芻した。

（私には柚香が必要なのだ）

空にあつた侍従らの、悠長な笑が突然止んだ。

それぞれの神隠し（１）

その者は、ここにあるべきはない存在。

朱善の強い願いに応じるにしても、格が違いすぎた。

手の中の柚香を握り潰しても、おかしくない敵方である。

だがその手にそっと柚香を抱く様は、敵意を一切感じさせない。

まるで壊れ物を包むようにそっと柚香を抱いていた。

「な、なぜ……『豊山一ノ輪麓』守夏様が、この『紅葉山』に」

朱善の疑問は上空の侍従も思っただろう。

状況が読めなくなったことを危惧してか、すぐに身を翻し姿を消した。

守夏は侍従らの姿を一瞥しただけで、柚香を抱いたまま裏参道に静かに下りる。

「まさかあなたも『大紅葉山』の不在を知りここに」

「そなたが理由を知る必要はない。だがこの方の命を奪うつもりで来たわけではない」

守夏の青い単眼はその中に眠る『紅葉山』の魂を射貫いていた。かつて『紅葉山一ノ宮麓』の名を持っていた彼からすれば、触れてさえいれば『紅葉山』が今どのような状態にあるかはすぐに分かった。

青い目はどこか悲痛な歪み方をして、一度だけ瞬きをした後は、じつと柚香を見つめている。

朱善にはどこか入り込めない空気がある。だがこのままにもできず声をかけた。

「守夏様、『大紅葉山』をお救い頂いたこと感謝いたします」

「幼きそなたの切なる願いに、答えたまでのことと　そういう事にしておくといい」

守夏はそれだけ言って空へ舞い上がり、瞬く間に闇に消えてしまった。

消えた方向は、朱善と柚香を奇襲した二柱の消えた海の方角である。

何か目的があつてのことだとは思うが、朱善は追求できる立場にはなかった。

朱善の心を立て、『紅葉山』を救つてくれただけで十分すぎる計らいだった。

優しく柚香の体を揺すつて起こすと、頭を抑えて深く深呼吸してから顔を上げた。

「朱善……私」

「大丈夫だ、敵は消えた」

「助けてくれたのね、ありがとう朱善」

一瞬何と返すべきか困つたが、柚香は返事を待たず朱善の無事を確かめた。

「腕、大丈夫？」

「外れただけだ。戻せばなんということはない。柚香が無事であれば私はそれで十分だ。私のことより、自分のことを考えるんだ。何度も言い付けてあつただろう。その器の中にいらっしやる『大紅葉山』の身に何かあれば」

そこまで口にして、朱善は自分の心と向かい合つた。

もう、迷う必要などどこにもないのだ。

「いいや、違う。私は柚香が死んでしまうのではないかと、恐かつた」

右手で柚香を引き寄せてぎゅつと胸に抱く。

柚香は朱善の胸の中で、その抱擁の意味が分からず戸惑つた。

「ご、ごめんね。ひとりで強がつてたけど私は何もできないし、やつぱり朱善がいなきゃ私は全然だめだね」

「私も、まだ 弱い。本当に何も守れない。だが強くなりたい。柚香、そなたのために。私は、稲荷である前にそなたの朱善だ」

それは、柚香が朱善に問いかけていた質問の答えだった。

朱善は、柚香を選ぶと決めたのだ。

「でも、そうすると朱善は」
「いいぞ」

朱善は脈略なくそれだけ言い放って少しだけ気まずそうに、そして不満さを抱いた様子で顔を上げた。

「私を『鮭』と呼ぶといい」
「『しゃけ』!？」

思わず、柚香は吹き出して笑ってしまった。

だがすぐに笑いを押し込み、朱善の言葉の意味を噛みしめた。

それは『紅葉山』を『柚子』が『あぶらあげ』と呼ぶのと同じ、深い絆の形だ。

「でもそれじゃ、『紅葉山一ノ宮麓』にはなれないでしょ。朱善の夢は叶わないかもしれないのよ」

「それでも柚香……そなたは私の『柚子』だ。そなたを守り、『大紅葉山』を守りたい。そなたはひとりではないのだ」

ぎゅっと柚香の背を抱きしめる手が熱い。

柚香は、いつの間にか自分の目から涙が落ちていることに気づいた。

柚香は手を伸ばして、朱善をぎゅっと引き寄せた。

「私は……『柚子』になれるの？」

「そうだ。そなたは私の『柚子』、私の嫁だ」

その言葉はどこか、事実はともねじ曲がっていて、柚香は顔を上げて微笑んだ。

「でもそれ……おかしくなっちゃうでしょ」

「何がおかしい」

「私は『紅葉山』なんだから、『柚子』にはなれない、そうでしょう？」

「私が言っているのは、ひとの子としてのそなただ」

「分かっている。分かっているけどね、もっとぴったりの二つ名があるでしょう。あなたは私を守ってくれる。それなら『紅葉山一ノ宮麓』じゃないの？ 朱善」

そつと柚香の唇が朱善の唇に触れた。

「ありがとう。私の守り手。あなたは私の『紅葉山一ノ宮麓』よ」
柔らかな質感は一瞬だけだったが、『紅葉山』である柚香の言葉と心に偽りはなかった。

若く幼いふたつの心は、己の道行きを選んだ。

お互いの心は、まっすぐに同じ方向を見つめ

互いの弱さを受け入れて、心通じ合ったのである。

突然朱善は目を細めて身を丸める。

体の奥が燃えるように熱く滾り、何か形を作ろうとしている。

「……っ!？」

突然腹の奥から生まれた灼熱に、思わず呻き両手で腹を抱えた。

形のない膨大な熱が腹の中で形を変えているのが分かる。その形がやがて輪郭を得てくると、朱善も自身の中に生まれたそれが何だか理解した。

苦しそうに浮かべていた表情は、どこか笑顔に似た痙攣に変わる。腹の中の輪郭は、十字をしていた。

朱善は小さな体には収まりきれないその熱を放出するように、腹を抱えていた手をゆっくりと解放し、手を広げる。

腹が淡い光に照らされて、形作られた十字 柄が見えた。

鐔から柄頭まで金糸で輝き、赤い小さな房が垂れている。

それは、朱善の腹を刃が突き抜けているようにしか見えない。

全容を理解できぬ状態だというのに、柚香は誘われるようにして柄を手にし、朱善の体を貫いている刀身を引き抜いた。

刃をそのまま空へ翳すと、その全容は月光を受けて輝く。

「き れ い」

柚香はその輝ける刃の全容を見つめ、気づいた。

赤い房を刀身につなぎ止める印象的な細工は、どこかで見たことがある。

社務所の売店の隅に置かれている紅葉山稻荷神社宝物録にあった。一ノ宮の宝物殿に奉納されている刀と似てる。

「これを、なんで朱善が持つてるの……？」

生み出した刃を引き抜いた後の朱善は、どこか遠くを見ていた。うつすらと発光していた体は、銀の髪にその光を残すだけになつていたが、まだ青い瞳はその光を吸って輝いている。

朱善の身に何が起こったのか分からない。

なぜ、突然刃を生み出したのか。

柚香は手にしていた劔を置いて、両手で朱善の肩を掴んだ。

軽く揺らすと、呆然としていた表情を横切るように、青い瞳から涙が一筋落ちる。

自分の落とした涙で覚醒したのか、朱善ははっと顔を上げて柚香を見る。何かを口にしようとして開けた口は、音を紡がない。

「大丈夫？ 朱善、何か視えてたの？」

「あ ああ」

無事を印象づけようとしたのか、朱善は深く二回頷き肩を掴む柚香の手を緩やかに戻した。

「何があつたの？ 私……何か言っちゃいけないことを言ったの？」

「いいや。これは、『紅葉山一ノ宮麓』。山を守る象徴だ。ひとつの子も知って居るかたちだろう」

「御神刃なのは知ってるよ。一ノ宮の社殿の奥にあるんだよね、本物は見たことないけど……」

「『紅葉山』のもので、つまり今はお前のものだ柚香」

顔を上げた朱善は、おまけと言うように「私自身もお前のものだと追加した。」

白刃をさらに細く鍛え束にしたような、美しい朱善の髪が柚香の頬を掠める。

「今『紅葉山』の柚香が、私に『一ノ宮麓』を命じたのだ。略式だが私はこの山の一ノ宮を司る稻荷神。侍従『紅葉山一ノ宮麓』朱善と為った」

「私は、そ、そんなつもりで……そんな大それた任命をする気じゃなくて、やだどうしよう。勝手に任命して『あぶらあげ』に怒られ

たら」

柚香を捕らえたまま、朱善は顔を近づけた。

「まだ児戯であるかもしれない。だけどお前は心から認めてくれた。お願いだ撤回はしないでくれ」

「……分かった。朱善……じゃなくて、『しゃけ』？」

朱善は、鼻から抜けるように脱力の笑みを零すと、柚香の肩を叩いた。

「いいとは言ったが、撤回する。それでは張りがなく気が抜ける。やはり名前で呼ぶことを許す。他の者には呼ばせなければ、私の名前はそなただけのものだ」

柚香は何も言葉を返せなかったが、そつと朱善の背に手を回し撫でてやった。

「朱善、『柚子』を助けるために立ち向かいたい、力を貸してくれらる？ 私は祐喜に『あぶらあげ』のことを分かって貰わなきゃいけない。これは私の、柚香だけの仕事。誰にも譲れないの」

朱善はゆっくりと柚香を抱く手を緩め、正面から黒い目を見つめた。

「祐喜の居場所も分かった。私の中に『あぶらあげ』がいることが、いろんなひとたちに知られてしまったみたいだから。もう一刻の猶予もないわ」

柚香の黒い目に、朱善ははつきりと映っている。

もうこの目に自分の姿が映らなくなるとしても、焼き付けて忘れられないほどに互いに見つめ合った。

「分かった。行こう」

朱善の言葉に、柚香は深く頷いた。

「作戦を決めましょう」

「そうだな……『大江山』のお姉様は今『大紅葉山』の気配に敏感になっておられる。私は柚香の宣下によって今『大江山』の管轄から外された。つまり『紅葉山』のものだ。そこを使おう」

「どうするの？」

「『大江山』で『紅葉山』の気配を臭わせば、駆けつけてくるはずだ。その間に柚香は『柚子』を連れて山を降り、ひとの世に帰れ。ひとの世と稲荷の世の境界は、柚香ならば視ることが出来るだろう」「分かった。その作戦、朱善は危なくないわよね」

「私より柚香の方が危険だ。稲荷の世はひとの世と時の流れに大きな差がある。無駄に長居はできぬだろう。私が引きつけられる時間も相手も限界がある。その間、身を守るためには、ひとの子の持つ力では到底叶わない」

朱善にできないのならば、さらに高位である『大江山』銀朱を止めることなど到底叶わない。

「『あぶらあげ』は力を貸してくれるか……分からないわ。もう、本当に……弱ってしまってる」

「だがそなたは『紅葉山』だ。御神刀を振るう力がある。それは稲荷の世においてこそ真の力を発揮する。危機に陥った時は『紅葉山一ノ宮麓』を呼ぶのだ。私と意味を同じくするもの。そなたの刃だ。私は絶対にそなたの呼び声に応える」

朱善は御神刀を柚香の手に委ねた。

刀は意志を持っているかのように、光の砂となって姿を消したが、柚香の中にある。

呼べばすぐに自分の力になってくれることが手に取るように分かった。

「柚香、私はお前を信じる。主として、『柚子』として、そなたそなたたちの願いを、叶えてみせる」

朱善は柚香の手をぎゅっと握りしめ、柚香もその手をゆっくりと握り替えた。

それぞれの神隠し (2)

柚香と朱善は『大江山』に渡ると、すぐに別れた。

本殿から白銀の稲荷神銀朱と、その侍従茂野が飛び出して行くのを、柚香は視認して石段を駆け上がる。

朱善が『大江山』と茂野を抑えられる時間は限度がある。

本殿に飛び込もうとすると、その前に祐喜が飛び出してくる。

柚香がここにいることに驚いたのか、目を丸くして

「どうしてここに」

と声を掛けてきた。

時同じくして、朱善もその驚きを投げかけられていた。

声をかけたのは山の主『大江山』銀朱と、侍従茂野である。

朱善は銀朱と茂野両方を眺めると、茂野の手にある草履が目についた。

朱善が放った『紅葉山』の気配に、狙い通りに飛びつき、履く余裕なく飛び出してきたのだろう。

「『大江山』のお姉様、お履きものを」

朱善に言われて、銀朱はやつと気づいた様子で茂野を見た。

茂野は銀朱に傳くと、泥の付いた足袋を履き替えさせて、美しい竹の描かれた足袋を履かせた。

銀朱は黙って履き替えを受け入れていたが、朱善から視線を離さないままだ。

理由は明白である、目に映る全ては自身の分社他ならないが、内なる気配は色を変えている。

稲荷の秋を象徴し、ひとの子の四季を紅に染める『紅葉山』の気配。

中身だけごっそり入れ替わってしまったように映っていた。

何があったかは全く想像がつかないが、何者かに操作されている可能性も拭えない。

「そなた……まこと朱善か」

朱善は美しい姉の所作を黙って見つめていた。いつも小綺麗に粧う姉が、無我夢中になり土を足で蹴ってやってくるほどに、心配を募らせているということだ。

朱善は、その姉の望みを一瞬とはいえ、切り裂こうとしている。切り札である『柚子』を、銀朱の手から逃がそうとしているのである。

「私は、朱善です」

ただすでに『大江山』の管理下からは外れている。

そういう意味では朱善は全く別のものだった。

胸にある記憶は、先代『紅葉山一ノ宮麓』から引き継いだ記憶が波打ち、今まで知ることのなかった『紅葉山』の景色も、山の移ろいも、里の景色も溶け込んでいる。

先代がその役目を終えた時に見た最後の景色もまた、張り裂けんほどの痛みと共に朱善の中にあつた。

朱善が柚香から役割を与えられた時に、流れ出た涙は先代のものだった。

朱善が見たこともない鬼神のような『紅葉山』の姿だった。

先代『紅葉山一ノ宮麓』は強制的に主からその座を引きずり下ろされた。

主を愛する心を踏みつけられ絶望の慟哭を最後に、千年以上の間『紅葉山一ノ宮麓』という位は宙に浮いていたのだ。

小さな朱善にはまだ早すぎるほどの、多くの感情と知識がまだごちゃ混ぜになっている。

だが今は、先代の感情に心を乱されている場合ではない。

朱善は自分の意志で、なりたいたいと思ったものに為ったままだ。

これからのことは、全て自分で切り開いていく。

「ですが、もう『大江山』のお姉様の朱善ではありません」

朱善の言葉に危険を感じたのか、茂野が一步前になる。

「お姉様！」

朱善を傍観する数が、横から増えた。

草をかき分けてやってきたのは、朱善の妹である『大江山』分社^{うか}祥香である。

「お姉様大変です。本殿に捕らえていたひとの子が逃げました。手引きがいるようです」

余計な事を報告しに来た妹に答えて、銀朱はすぐに茂野を走らせる。

「朱善……そなたの計らいか」

銀朱の問いかけに、朱善は黙って首を縦に振った。

「何を考えてのことか分からぬが、姉の膝元で意に反する行いをするということがどういふことか分かっておるだろうな」

銀朱の手が懷に差し込んだ扇を手にする。

美しい桜を描く金色の扇は、銀朱がかつての『葵山』より譲り受けたものである。

「私はもつとも優先すべきものの、力となることに決めたのです。お許し下さい」

朱善も銀朱へ白刃を差し向けた。

明確に向けられた反旗に、妹の祥香は驚いて銀朱の側へかけより盾になった。

「どうなさったのですかお兄様。しっかりして下さい！ お兄様が刃を向けておられるのは、『大江山』のお姉様です、私達の大事なお姉様ですよ！」

「ひとの子の里に下りる数が増え、毒気にやられて気が触れたのだろう。叩き臥せれば目を覚ます」

双方向を否めようとする祥香を挟み、朱善と銀朱の視線が交差する。

「祥香……どいて、無駄に多くを傷つけるつもりはないんだ」

朱善の言葉に祥香は向けられた刃が本気であることに気づく。

幼い頃から武芸の道を励んだ兄の姿はずっと目に焼き付いている。その敵に据えられたことは一度もないし、その切っ先は自分を守つ

てくれるものだと思っていた。

それなのに今、現実には祥香を突き刺そうとしている。

「全部あのひとの子のせい。お姉様、あのひとの子を追って下さい」
「しかし祥香」

「早くあのひとの子の役割を終わらせて、この世界から消して下さい！」

祥香の言葉の隅々から、ひとの子への嫌悪を感じる。

朱善は祥香を相手にする暇などないので、背を向けた銀朱を引き留めようと走り出した。

だがその足は祥香の壁が引き留める。

「お姉様の邪魔はさせません」

長い白銀の髪は、姉に懂れて伸ばしている。

くぬぎの実のように大きな青い目はまだ幼いが姉に良く似て宝石のようだ。

「何が気に入らないのですか、あのひとの子が信仰を取り戻せば、『大紅葉山』がお帰りになるかもしれない。今はそれしか方法がないというのに。お兄様だって『大紅葉山』にお帰り頂きたいでしょう！？」

「『大江山』のお姉様の力で取り戻しても、何の意味もないんだ。だからといって祥香」

「お姉様以上に『大紅葉山』を愛しておられる方はいません。お姉様の力で全てを取り戻すべきです」

祥香が必死になって朱善にくいついてくる。

「ひとの子なんて、ただ私達に願いを叶えてと、一方的にたかる生き物です。そのくせすぐ消えてしまっ、そんなものに『大紅葉山』は取り戻せない！」

朱善は祥香の必死の言葉を否定し、絡みついていた腕を振りほどいた。

乱暴に手を引きはがされて、祥香は地に尻餅をついた。

「私は分かりました。ひとの子は放っておくべきもの。触れてはい

けないもの。『大紅葉山』が間違えておられるんです！」

「撤回しろ祥香。それは違う！」

兄妹の視線は火花を散らし交差する。

その火花は、一对の青い目以外も息を潜め見つめていたが、兄妹は互いしか目に入らない。

「何が違うのですか。お兄様はいつもふらふら『紅葉山』におでかけになっているから見ておられないでしょう。あのひとの子の毒を受けてお姉様がどれだけ苦しみ傷ついたか。それでも神の子として毅然と立ち向かわれたお姿を見れば、どれだけ『大江山』のお姉様が心強くおられたか分かるものです。いいと言われされすれば、私が膝元のひとの子も、『紅葉山』の里の子も全部消して」

祥香の感情的な叫びを、朱善が頬を叩き止めさせた。

「その思いは、稲荷神としては抱いてはならない」

祥香は頬の痛みに最初気づかなかった。

膨れあがるように頬が腫れ、焼けるような痛みが覆ってやっと、自分が兄に頬を打たれたことに気づいた。

同時に我慢していた涙が浮かんで、頬へ落ちていく。

「『大江山』のお姉様に長兄って定められただけで、祥香とは年も変わらないのに、偉そうに……！」

頬を叩いた手を握りしめ、平の痛みを忘れないように朱善は表を上げて祥香を見た。

「私は山を預かった。世界の錦を縫い集め、空にもっとも高い処に紅葉を棚引かせる『紅葉山一ノ宮麓』」

朱善の目は、もう祥香を妹としては映さない。

未熟な『大江山』分社祥香を、目で射殺す。

「私は『紅葉山一ノ宮麓』朱善なのだから、祥香にわたしの里の子は、屠らせはしない」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9511x/>

ある稲荷の神隠し-稲荷兄弟篇-

2011年11月1日22時08分発行